

もう一度フクシマの原点に立ち返る

東京新聞特別報道部 田原 牧

安倍政権の原発推進策

安倍政権というのは、基本的には原発を推進していくということです。なぜか。原発を止めると、原子力発電所が不良債権になるからです。廃炉と決めるまでは、炉にしても燃料にしても資産ですけれども、廃炉と決めたとたんに、それは処理する金も含めて負債に180度転じてしまうので、当然のことながら電力会社の大半は債務超過に陥る。つまり、事実上倒産ということに等しい状態になるので、これはたまらないわけです。加えて、電力会社に融資している金融機関が焦げ付きを抱えることになりますから、そんな恐ろしいことは、やはり、財界の代弁をせざるを得ない自民党としては絶対できないということなんだろうと思います。ですから、安倍首相のいう「道を開くことを検討する」というのは、道を開くことで、まずは原発輸出から始めていくということだと思います。

◆なぜ、原発に反対するのか

では、なんでエネルギーが足らなからうが、安全性が十分であろうが（そういうことはあり得ないんですけども）原発はいけないという話をするかということ、これは私がずっと思っていることですが、人柱っていうか、人身御供によって成立しているシステムであるということが、最もグロテスクだということです。つまり、確実に被曝労働者を必要とするということです。原発を動かしているということは、常に人を犠牲にしているという話です。すごく簡単なことですが、社会の中で通らないということが、とても困っています。

それから、このシステムが社会の中でどういう影響を及ぼすのかということは誰も考えない。技術者は目の前の複雑な計算などを、ただ一生懸命やる。だから、みんなすごくまじめだし、いい人たちだって、多分、そういうことなんです。おおよそそういうことのほうが世の中多い。つまり、それは軍人さんなんかが典型で、やはり、軍人は基本的に政治を考えちゃいけないということが、どこの軍でも一応の原則で、別に自分たちが軍事行動をすることの意味、それがいったい世の中で見るときに、理不尽なことなのかどうなのかってことは、考えない。つまり、1つの機械になるっていう

ことです。それと同じことが原子力でもいえるのだろうと思います。

ですから、原発に反対するとか、脱原発とか言うことは、ある種突き詰めると、世の中から後ろ指を指されることを、断じていとわないという覚悟が必要だろうと思います。首相官邸前の抗議行動などは人がたくさん集まったほうが良いという論理も分かるので、一定評価するんですが、その反面、集まりやすさを優先することによってその辺の覚悟を曖昧にすると、最終的にはあまり力にならないだろうなど、冷ややかに見ているところがあります。ですから社会の産物で原発がある以上、最終的には社会が変わらないと、なかなか変わらないと考えるわけです。

◆私たちは原点をどこに置くのか～フクシマの現在

そう考えると、何もうれしいわけではないですが、一時の脱原発の高揚というのは終息を強いられてくると私は思っています。そのときに踏みとどまる足場はなんだろうかと思うと、それは相手がマクロでいろんなことを言うてくることに対して、一番強いのは、やはりミクロのリアリティだと思っています。「あなたたち好き勝手言うけど、見ろ、これ」っていうのが、やっぱり一番説得力があります。その意味で、私たちはフクシマにもう一度、考え方を戻していかななくてはならないだろうと思っています。新聞を作るときに心掛けているのは、今フクシマはどうなっているのかということが加速度的に忘れられてきていますから、やはりここに固執しなくてはいけないと思っています。

そして、おそらくそれと反比例して、事故直後以上にこれからのほうがフクシマの避難民の人たちの生活はしんどくなってきていますから、そこを私たちのほうが、結び付いていかないといけないだろうと思っています。例えばこの間取材している中で記憶に残ったことを羅列すると、1つは強制的に避難をさせられた人たちが、皆さん異口同音に大変肩身が狭くなっているとおっしゃる。それはどういうことかということ、この間も、飯館村の人と話したときに、「飯館から来てるって言えない」と言うんですね。なぜかと言うと、「金もらってたろう、税金なんか結構免除されてるだろう」というようなことで、結構意地悪な視線で、冷や

やかに近所の人に言われたりしたことがあるそうです。

また、いわき市では、「避難民はけしからん」て盛んに言われていました。その訳は働かないで昼間から酒飲んでパチンコやってるみたいなことです。しかも交通渋滞はひどくなり、病院も混むようになり、ハワイアンセンターを予約しようと思ったら避難民が殺到していて予約取れなかったみたいな話です。こうした話は、現地へ行くと珍しくありません。

でもこれは構造的な問題であって、特に賠償に絡んでいます。この賠償問題は東電救済の話とも結び付いてくるんですけども、新しく仕事を見つけると言ったところで、新しくどこに住むかということが定まらない限り、なかなか仕事を見つけようがない。話はズレますが、ホームレスの人たちも仕事がなかなか見つけにくい理由の1つは住居が定まらないということがあります。賠償の際に土地は事故前の価格になっていますが、上屋は、例えば30年40年住んだ家があるとしますとほとんど評価額がゼロです。そうすると家を処分する賠償額が、1,000万円とか、1,500万円という額だと、転居して一軒家を建てようとか、あるいはマンション買おうとかできないわけです。

避難指示解除準備区域は年間の外部の被曝線量が20ミリシーベルト未満ですが、その線量でもとんでもないということ言ってる限り、賠償金が手に入らない。そういう中で、住むところがなかなか定まらないから、働きようもなかなか定まらない。なんとなくうつうつとして酒でも飲まずにはいられないという気分していると、怠け者と言われ、さらにバッシングされるという、大変気の毒な流れがあります。

あと、安全神話が終わったあとに安心神話が出て来ています。この間、飯館村の広報の小さなコラムを見ましたら、放射能は体にいいぐらいのことを言っている東京大学の先生が書いていました。

もう1つ、今、福島県中通りの幼稚園が、どこも存続の危機にあるという話があります。どうしてかという、元からある少子化の話は置いておいて、1つの要因はお金にそれなりに余裕のある若い夫婦たちは結構自主的に避難し、子どもがガクンと減ってきました。それから、幼稚園に対する賠償は、園児減少に伴う授業料補填分ぐらいのお金は出るのですが、例えば砂場を除染したり、砂場を屋内に独自に作ったりしている賠償は一切ありません。東電は出さないとはいませんが、まだちょっとそれは、間に合いませんねみたいな引き延ばしをしてるわけです。そういう中で、幼稚園経営がしんどいという状況です。

またお母さんたちの間では、放射能の話題は、もうタブーになっています。そういうことを話す人は、みんなよそよそしくしちゃうみたいな現状があります。そして先ほど申し上げたように、避難生活が続くと経済的にもしんどくなってきている。そうすると、どうしても、20ミリシーベルト未満の基準をのまざるを得ないような状態にだんだんなってきているということです。小さいお子さんなんかを抱えていらっしゃる方が、年間20ミリシーベルト未満でもいいですって言って帰るっていうことは、よほど苦渋の選択だろうと私は思いますが、こうした目に見えない締め付けがどんどん強くなっています。

国も東電も、除染に関してはとにかくおざなりにしています。最終的にはやっぱり東電が払えないから、国が払うことにしようとなるような気がします。でも、今は一応建前上、東電が除染費用負担する。汚した当事者ですから当たり前ですけども、手の込んだ除染はお金が掛かるからしない。林野庁がバイオマス発電を福島で重点的にやりましょうというプランを提案したのですが、去年の暮れに民主党政権が終わる間に、新仕分けによって潰されました。どうしてかという、再生可能エネルギー買い取り制度にバイオマスも入っているから、これ以上の補助はだめだという理由です。事業仕分けは基本的に財務省が全部結論まで最初から決めていきます。財務省はなるべく東電に負担を掛けたくない。林野庁の事業はともすれば、東電からお金を引っ張るみたいな話になりかねないので、それを恐れたのでしょう。

さらに、フクシマの人びとはお金で計れない損失も被っています。どういうことかという、例えばお寺がものすごく激減しているんですね。特に浜通りは壊滅的です。お寺が無くなるということは、墓場が荒れるということで、お墓が倒れたままでは年に一度の墓参りもできず、家族が集まる機会もなくなり本当にバラバラになる。コミュニティーが崩壊する。こうした現象がすでに起きています。

それから、日本大学の糸長先生が独自に行った飯館村アンケート調査によると、年間20ミリシーベルト未満ぐらいであったら戻りますかという質問に対して、7割ぐらいの方が、「20ミリだったら戻らない」と言っています。

あと、幼稚園児が「外で運動していないので、転びやすくなった」そうです。同じように体力が落ちた、怒りっぽくなった、6割の親御さんが子どもの将来や結婚についてとても心配している——というような結果が出ていました。

飯館村は盛んに国とタイアップして、除染のためにすごいお金を入れているんですけど、村民の方々の受け止め方は、「人体実験のような除染にお金を使うんだったら、避難先での生活再建に回してくれ」ということが圧倒的でした。また7割ぐらいの方が、「国だとか村だとか、行政単位で決めるのをやめてくれ」、「自分たちで決めさせろ」とおっしゃっていました。

こうした現実には、もう一度私たちは、自分たちの、脱原発なり、反原発の視点を据えないといけないのではないかと思っています。

◆反撃の視点を探る～したたかな不服従

この間の衆院選挙で結構ショックが大きくて、ちょっといやになった、疲れちゃったという人が多いようです。でも冷静に見ると、六ヶ所再処理工場は、あと2、3年が限界ですから、再稼働するといったところで使用済み核燃料を処分できないわけです。

嫌な時代ではあるんですけど、マクロのいろんな議論や言説にはあんまり頼らないほうがいいと思っています。むしろ、ミクロのリアリティーに固執したほうがいいのではないかと、そこからしか闘い得ないのではないかなと思います。

もう1つ、先の戦争では最後には特攻隊までやったわけです。戦後の平和教育の中では、国民のみんなが戦争を恨んでましたというけれど、あれは大うそで、当時は結構イケイケ気分で特攻隊をみんなで励ましていたんだと思います。原発事故発生直後の数日間退避せず現場に残って復旧作業にあたった約50人の作業員（フクシマフィフティー）に対しても、特攻隊の乗りだったんじゃないかと感じました。そもそも日本人って、メンタリティーが、割と集団で狂気の時って、狂気だって自覚できません。さきほどの福島の幼稚園の屋内に砂場を作る話も、頑張ってるんですという若い父親がいるんですが、屋内の砂場っていうもの自体がシュール（現実離れしたさま）です。

だから、リアリティーに固執するというのは正気を取り戻すということだと私は考えています。正気というものが、私たちが思っている以上に失われやすい国です。原発政策も、ちょっと突き放して見れば、狂気ですよ。でも、それをみんな一生懸命やって、多くの人が気に留めていない。ちょっと、正気じゃない状態だというふうに現状を見るほうがいいと思っています。

ともすると対抗する体系的な論理なり展望を持つように言われますよね。原発に関しても反対するとエネルギー政策で対論を必ず出せって言うんですね。だけ

ど、そんなものがなくなっちゃって、だめなものはだめでいいと思ってるんです。それは、倫理の問題で、倫理的にそういったことは許されないっていう、それだけで十分なのです。対論を作らないと、今ある論を否定できないというのは、幻想だと私は思っています。再生可能エネルギーがまだどうなるか分からないという言説が割と通ってる中で、だから、原発が必要だという話になりますけど、それは詐術で、そもそもそうした土俵に乗ってはダメだと思っています。つまり、対抗する諸体系が全部なくなっちゃって、だめなものはだめだという不服従というのが絶対に必要だと思っています。だめって言ったあと、いよいよ困ったら考えればいいんです。

◆足元で対抗社会を進めていく

もちろん、対抗的な社会の構築というのはどんどん足下で進めていけばいいと思います。ですから、福島のパイオマス発電なんかもそうですけども、これは、除染と林業人口を増やすこと、つまり地元の雇用を作るといことですが、非常に面白い試みで、私はどんどんやったらいいのではないかなとか思います。

また、電力制度改革の話と結びついてくるんですけど、いろんな地域で、とにかく原発以外の発電を、エネファームにいたるまでとにかく作っていっちゃうというのが、実は力になります。だってあるんだもんというリアリティーもまた、やはりすごく説得力を持つことだと思っています。



田原 牧 (たはら まき)